資料７

「大綱及び教育振興基本計画の基本的な考え方」に関する実践委員会の意見

○　ＩＣＴの活用が広がっていくと、「徳」は、理想として掲げるだけでなく、どのように実生活に反映させていくかがますます重要になってくる。

○　国際化や英語教育が進み、英語と社会がつながっていくと、日本の良さの喪失につながる。宗教的な軸足や道徳的な軸足がない中で日本の良さが喪失していくと、社会の混乱が懸念されるが、「徳」が全体のバランスを整える大切な鍵になっていく。

○　日本には、宗教教育がなくても「徳」の教育が生活の中に根付いており、例えば日本語を丁寧に見直していくなど、日本的なものを見直していくことで維持できる。

○　現場では、静岡県が「徳」を重視していることを意識している教員や生徒はほとんどいないと思う。どのように現場に「徳」を反映させていくか具体的なことを考えていかなければならない。

○　具体的に実生活で「徳」をどのように教えていくかが大事である。「徳」は、人と人との触れ合いや昔の人の言動に触れることから学ぶことが多い。例えば、福井県では、橋本左内の啓発録から学んでおり、自分の志を書かせる。静岡県でも、中学や高校のときに自分の進路や目指す人間像が少しでもつかめるきっかけがつくれたらよい。

○　静岡県にいると進路や就職等の情報の不足があり、東京の大学生と比べて、将来のビジョンの解像度が全く違うと感じる。中学校や高校において、こういう仕事があるということをもっと教えてほしかった。

○　静岡県には取り残されないための多くのシステムがあるが、それをきちんとＰＲするとともに、窓口を幅広くし、アクセスしやすい状況をつくることが大事である。格差があるからこそ社会福祉もあるが、人に迷惑をかけてはいけないという日本社会の大きなバリアがある。そこの格差をどう改善していくかが課題である。

○　ＳＤＧｓの「誰一人取り残さない」というのは、弱者や恵まれていない方々に向けて細かく対応するということではなく、経済的・社会的な不平等の中で人々が取り残されていくので、それをどう改善するかが大事な視点である。

○　「誰一人取り残さない」ためには、子供を見ることと子供に見せることができればよい。困窮して困ってしまうと、エネルギーが奪われ、やる気も全て失ってしまうので、大人がきちん見ている、認めてあげることが必要である。

○　「徳」を積ませるのには、大人が見せるしかない。情報量がなく、見ることができないものは憧れることもできない。子供たちに様々な選択肢があることを教えたり、才能に気付いて背中を押してあげたりしたいと思ってキャリア教育を行っている。

○　静岡県の教育で「徳」を大事にしているという具体的な中身は２つあると考える。一つは、横並びでなくてよいということである。もう一つは、倫理は守っているということである。倫理はきちんと守れているということが自覚できれば、人間として最低限の誇りは維持でき、コンプレックスがあっても、セルフネグレクトにはならない。

○　上から目線ではなく、その人と同じ立場に立て、この人と自分がつながっているという意識を持てば、子供たちは心を開いてくれる。

○　この実践委員会の熱量を県民はほとんど知らない。こういう議論がされている、こういうことを静岡県の教育で考えようとしているということを、語られた言葉で伝えていくということを大事にしていくと、もっと共感する人が増えていく。